

認知主体による対象の序列化と極限について
—英語の動詞 “bet” を中心に—

Cognizing Hierarchies and Extremes in Objects
From the Conceptualizers' Construal:
The Case of the Verb “Bet”

有 光 奈 美

(Nami ARIMITSU)

認知主体による対象の序列化と極限について

—英語の動詞 “bet” を中心に—

Cognizing Hierarchies and Extremes in Objects From the Conceptualizers' Construal: The Case of the Verb “Bet”

有光 奈美

はじめに

英語の動詞 “bet” は、「(金銭などを) (〜に) 賭ける、(人と) (〜で) 賭けをする」という意味で用いられる。しかし、それだけではなく、物事の認知に関わる認知主体の解釈や態度表明が “bet” に込められることがある。「〜であると確信している・〜であると思う」とパラフレーズ可能な場合もあるが、単なる思考動詞とも異なる。英語で話者が「〜であると確信している・〜であると思う」という意味を表現できる動詞は複数存在しているが、“bet” は “believe,” “think,” “assume,” “suppose” 等の思考動詞群とその性質において異なる点がある。日本語の動詞「賭ける」は英語のように金銭的賭けから「〜であると確信している、〜であると思う」のような意味にダイナミックに拡張していない。本論文では英語の動詞 “bet” を論じることを通して、英語話者としての認知主体が「bet・賭ける」という行為をどのようにとらえ、さらに賭ける対象について序列化と極限をどのように把握しているかを知る手がかりを得ることを目指す。第一に、その背景に「賭けても良いほど」という比喩的な基盤が存在していることを示す。第二に、賭けるという動詞の指す意味そのものに注目し、人が一般に何に対して何を賭けるのかということを論じ、その背景に認知主体による対象の序列化のプロセスと対象に関わる極限の認識の存在を指摘することを目的とする。

1. 辞書における英語の動詞 “bet” の意味

まず、“bet” についてランダムハウス英和大辞典第二版 (1973, 1994, 小学館) では以下のような紹介がされている。他動詞として「1. (金を) (…に) 賭ける。(…に) (金を) 賭ける」「2. (人と) (…について) 賭けをする」「3. (人に) (金を) (きっと…だと) 賭ける。(金を) 賭けて (…と主張する、断言する)」と3つの用例があり、自動詞として「{…に} 賭ける、賭け事をする」という用例が示されている。

- | | |
|--|---------------------------------------|
| (1) What will you bet? | (4) bet with a person |
| (2) He bet \$ 20 on the racehorse. | (5) bet on her coming |
| (3) will bet (you) (ten dollars) that she won't turn up. | (6) Do you want to bet [= wanna bet]? |
| | (7) I'll bet against your winning. |

「君は何を賭けるか」「彼はあの競争馬に 20 ドル賭けた」といった表現と比べて「10 ドル賭けてもいい。彼女はきっと現れないよ」「君が勝たない方に賭けよう」という表現は、話者の心理、物事の認知に関わる認知主体の解釈や態度表明を示す。これらが「～であると確信している、～であると思う」とパラフレーズ可能な場合である。リーダーズ英和辞典第二版(1999, 2008)・リーダーズ・プラス(1994, 2008, 研究社)では、“I’ll bet against your winning.”を「君が勝てたら金を出すよ」という日本語で紹介している。実際に金銭利益の授受が行われるかもしれないが、授受を伴わない場合も有り得る。単に「私は君が勝てないと思う」という解釈もできる。なぜ「賭ける」が「思う」の意味に成り得る場合があるのか、また、“I will bet (you) (ten dollars) that she won’t turn up.”のように“you,” “ten dollars”の二つの要素を省略可能でもあること、さらに“ten dollars”のような金銭表現以外にも名詞が入りうること、その名詞に序列化と極限が存在することを指摘する。

2. 「(目的語) (that SV) であると (人に) 賭ける」という用例について

2.1 実際に金銭や利益の授受がある場合

まず、実際の賭け事の描写表現として、金銭や利益の授受があると理解される場合を扱う。以下はジーニアス英和大辞典(大修館書店, 2001, 2010)からの引用である。

- (8) I bet five pounds on the hours. = 《英》 I bet the horse five pounds.
- (9) I bet John on the baseball game.
- (10) It’s foolish to bet on that horse.

これらは語レベルの内容に対して、「その馬に／5 ポンドを／賭ける」というように動作主が「賭ける行為」を行う。新英和中辞典第七版(2003, 研究社)にある“bet”の「(目的語) (that SV) であると (人に) 賭ける」という用例に注目する。

- (11) I’ll bet you a pound (that) he will win.
- (12) I made a bet that you would win the race.

語レベルの「その馬」と比べて、ここではthat 節に「彼が勝つこと」や「あなたがレースに勝つこと」を取り、that 節の内容に対して動作主が「賭ける行為」を行う。ジーニアス英和大辞典(大修館書店, 2001, 2010)に以下のパラフレーズがある。

- (13) I bet (you) a pound that he will succeed. = I bet (you) a pound on his success.

「彼が成功すること」は「彼の成功」とも理解可能であり、賭けの対象となる事態は語レベルでも that 節レベルでも容認可能である。日本語でも「賭ける」が「負けた者が買った者に金品を払うことをあらかじめ約束して勝負を行う。賭け事をする」を意味すると広辞苑第六版(2008, 2012 岩波書店)に示される内容と対応している。

2.2 実際に金銭や利益の授受がないことが含まれる場合

引き続き「(目的語) (that SV) であると (人に) 賭ける」という用例に注目するが、実際の賭け事を描写する表現ではなく、金銭や利益の授受が必ずしも無くても良いように理解されることもある。「実際の賭け事を描写する表現」と構造上は似通っているが、金銭や利益の移動を必ずしも伴わず、単に認知主体の認識、信念を投影し「(目的語) (that SV) であると (人に) (賭けて) 主張する、断言する」と解釈される用例である。以下はジーニアス英和大辞典（大修館書店，2001，2010）からの用例である。

(14) I bet anything she's lying.

(15) Sean bet that I wouldn't pass my exam.

(16) The critics are betting that the economics strategy will be successful.

「彼女が嘘をついていることについて、何を賭けても良い」は、すなわち「彼女は絶対に嘘をついていると自分は思う」と解釈できる。単なる“think”よりも強い。また、「ショーンは私が試験に受からないことに賭けた」は「ショーンは私が試験に受からないと断言した」と解釈可能である。さらに、“bet”が進行形なら、「その経済戦略は成功するだろうとその評論家たちは予想している」のように未来の予想や予測を表現できる。賭け事としての金銭や利益の授受は必ずしも行われぬ。前セクションにて概観した用例を再度検討する。

(17) (=3 前述) I will bet (you) (ten dollars) that she won't turn up. (ランダムハウス)

この表現からもわかるように、(you) と (ten dollars) という二要素について、実際の発話では省略可能である。省略が許されることから、(you) と (ten dollars) という二つの要素の位置に何が入ることが可能か、いかなる要素もそこに入りうるのか、何か制限や制約や傾向はあるのか論じる。ここでは (ten dollars) が省略可能であることから、必ずしも金銭や利益が明示的に示されなくても良く、実際に具体的な金銭や利益の授受が行われなくても良いことを確認しておく。“ten dollars”の場合、金額が一般に高額であるとは言えないことから、真剣さはそれほどなく、気軽な賭けやあてっこ遊びの域であるとも考えられる。実際に払わなくても良いこともありえるし、アルコールを一杯おごるといった代替的行為で曖昧に補われることもありえる。「賭ける」という表現を使うことで自信や確信を示したいという意図があるが、真剣さの度合いは賭けに用いる対象の深刻さや貴重さの度合いで評価できる可能性がある。新英和中辞典第七版（2003，研究社）では以下の用例も示されている。

(18) I bet (you) that she'll come. / (19) I bet you a pound (that) he has forgotten.

逐語的に解釈すれば「彼女はやってくるということについて、私はあなたに賭ける」

となるが、実際は「彼女はやってくると思う」と解釈される。同様に「私はあなたに賭ける」という部分は「彼は忘れてしまったのだと思う（忘れたに違いない）」という意味で、“I bet you a pound (that) he has forgotten.” という発話が「真に現実世界における未来の1ポンドの金銭の授受の約束」なのか、「1ポンドの金銭の授受を約束しても良いほどに“he has forgotten.”という事態に対して認知主体が確信を持っていることを強調したい比喩的表現」なのか、話し手と聞き手との関係性、文脈、イントネーションといった語用論的要素によって動的に意味が変化しうる。この位置における“a pound”の性質は以下で論じる。また、次のような口語表現も存在する。新英和大辞典第六版(2002, 研究社)には三人称を主語にした“He bet (me) five dollars (on the outcome of the race)/ He bet (me) five dollars that he would win.”等のように「種々の構文が可能である」と記されている。

(20) (=6 再掲) Do you want to bet [= wanna bet]? (ランダムハウス)

直訳すると「あなたは賭けたいか？」であるが、実際はギャンブルとしての賭け事への参加希望の有無を尋ねているのではなく「確かか?」「本気か?」という相手への疑念の表明である。聞き手は「(その主張は) 確かだ」「(私はその主張が真実であるということについて) 本気だ」と述べたいなら“Sure, I bet.”や“Yes!”等と答える。たとえばAの“I can pass the exam.”という発話に対してBが“Wanna bet?”と答えたとする。この時、BはAへの反論や疑惑を表すことになり“No way, you can't. I doubt it.”を意味する。また、Aの“I can pass the exam.”という発話に対してBが“No way, you can't. I doubt it.”と答えたとする。そのBに対してAが“Wanna bet?”と答えたとしたら、AはBへの反論や疑惑を表すことになり、“Yes, I can.”を意味する。つまり、前言に対して反論や疑惑を表明すると考えられる。さらに「敗者が勝者に金品を払うことをあらかじめ約束して賭けの勝負を行う」という意味を含むことも、含まないこともある。金品を払う約束を含まない場合、単なる「賭けても良いくらい、あなたの主張内容に確信があるのか?」という比喩的な問いかけであると解釈可能である。

3. 賭ける対象について

3.1 “bet”に関わる序列化と極性：賭けに用いる対象の特徴が極小に向かう場合

“bet”が用いられる際、何が賭けに用いる対象となり得るのかに注目する。OED (Oxford English Dictionary) では“In various (orig. U.S.) slang asseverative phrases meaning: to stake everything or all one's resources (upon the truth of an assertion).”として、以下の表現が示されている。

(21) You may bet your old boots on that (1856)

(22) Smart! You bet your life 'twas that!

(23) You bet yer bones.

(24) While to “You bet your boots,” is confirmation strong as holy writ --- in the mines, at least.

- (25) “You will order yourself something substantial, marvelchild?” “Bet your life,”
said the son and heir tersely.
(26) “You bet your boots,” he replied.
(27) He would bet his bottom dollar...that his target would be one of those bases.

“bet”は[人に][金銭・利益を][ある事態について]賭けるという動詞構造を持つが、[金銭・利益を]の位置に入る要素に関する傾向を指摘する。一つは賭けに用いる対象の特徴が極小に向かう場合で、もう一つは極大に向かう場合である。まず、極小を扱う。

- (28) bet one's boots⁽²⁾ (29) You can bet your boots on that.
(30) You can bet your boots that he will succeed.

新英和大辞典第六版(2002, 研究社)によると「①最後の有り金[持ち物]まで賭ける。②[…は]きっと大丈夫だ[間違いない] (bet on)」ということから話者の強い信念を表現することになる。「最後の持ち物」として他にも以下の例がある。

- (31) You bet your [bottom dollar/ shirt].

口語で「確かに、違いない」という意味である。「最後に(財布や袋の底に)残った1ドル(1ドル札一枚を想定するが、一枚であればその他の金額の紙幣でも有り得る)を賭ける」ということは無一文という極小の方向に向かうと考えられ、甚だしい程度を表す「～ということについて、確信している」という認知主体の強い主張、信念の表明である。主観的価値があると見なせるなら“boots”の位置に“bottom dollar”や“shirt”以外にも創造的にいろいろな要素が入る。“old shoes”等は笑いを誘う例である。“bottom dollar”は極小に向かうのが明確だが、比して“boots,” “shirt”や“old shoes”等は確かに身に着けるものとして不可欠ではあるものの現代社会では価値さえあればいくらでも代替可能で、それがかえって賭けの遊びとしての側面を際立たせるように聴こえ得るのかもしれない。

なお、英語におけるシャツの捉え方は“draw one's shirt off”のように本物の衣服を脱ぎ着することを表すだけでなく、“get someone's shirt off” (怒らせる、癩癬を起こさせる)、“get someone's shirt out [off] (one's back)” (大切なもの[財産]を全部あげてしまう、何でもくれてやる、何でもしてやる)という拡張的用例を持つ。特に“He would get his shirt off his back.”等の場合、いわゆる日本語の「一肌脱ぐ」という表現と対照可能で、英語がシャツで表す対象を日本語は肌で表している。肌は決して脱ぐことはできずメタフォリカル表現であるとわかりやすい一方で、英語のシャツは日本語における単なる代替可能な衣類ではなく、「価値のあるもの」「貴重なもの」としての視点が現存していることがわかる。

また、上で見た“I bet you a pound (that) he has forgotten.”でも1ポンドは一般に日常生活では小額と言われる金額で、極小に向かう。しかし、“bottom pound” (“last

pound”の意味)ではない点が上の例と異なる。1 ポンドは小額で、深刻ではないちょっとした遊びと解釈できる。「賭けに負けて、その対象を失うことになる」と大いに困るものとは異なる。この位置に入れるものの性質で、話者の信念の強弱を表現できる。すなわち、同じ「賭けても良い」という信念の中でも強弱がありうる。ここで導入できるのが“a gentlemen's bet”という視点である。「bet/賭け事・賭けること」を一種の娯楽であると捉えるような“Betting is a kind of entertainment.”という考え方を背景に指摘できる。確かに、ジーニアス英和大辞典(大修館書店, 2001, 2010)に以下のような例文を見つげられる。

- (32) There you can observe the English having a good time—eating, drinking and betting (and sometimes watching the race).

こうしたことから「bet/ 賭け事・賭けること」を「食べる」「飲む」等の活動と並列できる。並列された活動は“having a good time”の内容として列挙される。「bet/ 賭け事・賭けること」は常に真剣勝負というわけではなく、楽しみとしての面も存在する。日本語でも「当てっこをして楽しむ」ことがあるように、「明日晴れる方に賭ける」と言った時、本当に金銭を賭けるかは場面次第である。口では「賭ける」という表現を使いつつ、実際には金銭を賭けないこともある。そうであれば、極小に向かう場合の特徴には以下の二つがある。「①真剣勝負としての賭け事で、非常に重要なモノとしての「最後の/使い切るとゼロになってしまう/ゼロになると極めて困った否定的価値を伴う状況が予測される/すなわち破産という極めて厳しい状況を招き得る/そのような価値のある対象を賭けに用いることによる強意」と、もう一つ「②娯楽や潤滑油としての聞き手を楽しませる遊びに用いるようなたいして金銭的価値がない対象を用いて賭ける、実際にはそのものを賭けなくても構わないという遊びの特徴を用いた装飾的な際立ちによる強意」があると考えられる。

3.2 “bet”に関わる序列化と極性：賭けに用いる対象の特徴が極大に向かう場合

“bet”の持つ[人に][金銭・利益を][ある事態について]賭けるという動詞構造において[金銭・利益を]の位置に入る要素が、極大に向かう性質を持つ場合も存在する。

- (33) bet the farm/ranch (American)
to spend almost all the money you have on something that you think might bring you success (often + on)
“TV networks are obviously willing to bet the ranch on special sports events - they paid millions to broadcast the Olympics.”
(Cambridge Idioms Dictionary, 2nd ed. Cambridge University Press: 2006.)
- (34) bet the farm
to risk everything you have because you are certain of something

(Cambridge Dictionary of American Idioms, Cambridge University Press: 2003.)

“No matter how confident you are in the future, you should never bet the farm on one idea.

(35) (=22 再掲・抜粋) You bet your life/ your sweet life.

一般に農場は財産の一部を占める大きなもので、したがって「全財産を賭ける」という意味として解釈される。「あなたは命を賭けて良いくらいだと自分は思う（命を賭けて、その賭けに負けたら命を失う／すなわち、極めて否定的価値の強い状況を招く／死ぬことは生物として最も避けたいことのひとつである／自分はこの賭けに勝つから死ぬようなことにはならない／賭けに負けることは無い／この主張は正しいのだから、賭けても大丈夫である）」ということから「絶対に間違いない」という意味になる。なお、日本語でも「賭ける」すなわち「強い決意を示すために、失敗した時に失う物として最も大事なものを引き合いに出す（例：交渉成立に首を賭ける）」（広辞苑）と示される内容と対応する。他にも「金品を賭ける」だけでなく、「首」の類例として「社運を賭ける」等の表現はある^①。これらは「失敗したときには大切なものを全部失う覚悟で物事に当たる。賭する」（デジタル大辞泉、2015、小学館）とあるように、決意、覚悟と結びついている。また、日本語で「絶対そうだ、賭けてもいい」とは言うが、「～しても」という明示的な形態が付加された比喩表現で、英語のように「賭ける」一語で「確信している、絶対そうだ」という意味にはならない。日本語では「賭けても良い『ほどの』」という比喩的マーカーが依然として顕在している。

金銭的なものとして *one's car*, *one's life savings* 等の価値の高い対象物を挙げられる。特徴的なのは身体表現で、*one's right arm*, *one's left arm*, *one of legs*, *ass/buns*, *bones* 等を賭けられる。この位置に爪や頭髮といった周辺の身体関連表現を入れても解釈可能だろうが、より文脈が必要となる。つまり身体部位であっても生命維持に関する重要性の階層が言語表現に反映されている。The American Heritage Dictionary of Idioms (Christine Ammer. 2003, 1997, 1992. Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company)は“All these phrases in effect mean that you can be so sure of something that you can wager your body or life or valuables on it.”として、価値あるモノを賭けられるほどの確信を指摘している。Cambridge Dictionary of American Idioms (Cambridge University Press, 2003)は“used to emphasize your agreement with something”として、確信や同意の強調表現であるとしている。高額金銭、命、生命維持に重要な役割を果たす身体部位等を引き合いに出すとき、遊びや当てっこの側面は薄れ、認知主体の確信の強さを（極小に向かう事例以上に）表現すると考えられる。

3.3 “bet”に関わる序列化と極性 vs. NPIs との接点

ここでは賭けに用いる対象に見られる極小と極大、すなわち序列化と極性という特徴が Negative Polarity Items (NPIs: 否定極性項目) と通じることを指摘する。van der Wouden (1994:5) は NPIs を “Negative polarity items (NPIs) are expressions

which can only appear felicitously in negative contexts.”と定義している。

(36) I couldn't sleep a bit.

(37) I don't know him at all.

同じNPIsでも“a bit”は極小に向かい、“all”は極大に向かう要素である。NPIsに関していえば中庸の程度表現は見当たらない。他の極小表現に“any,” “a red cent,”

“a damn thing,” “a bit,” “a single bit,” “bat an eyelash,” “budge an inch”, “care a hoot,” “drink a drop,” “lift a finger,” “say a word”等がある。日本語では「何も」

「少しも」「ちっとも」「つゆさえ」「ゆめにも」「一つも」「一滴も」等がある。極大要素として“at all”や「全く」等がある。ここで指摘したいのはNPIsの多くは量・程度表現と関連するのに対し、英語の動詞“bet”が求める序列化と極性は、純粋な量・程度表現と関連というわけではない点である。これは本当に賭けても良いし賭けなくても良いという“bet”の特性を背景とする。NPIsが量・程度にかかわる明示的な段階性を要求するのに対し、“bet”が求める序列化と極性は純粋な量・程度でなくとも良いだけでなく、序列化と極性がNPIsより主観的で、社会一般に言われる価値だけではなく、認知主体が賭けに用いられる対象について主観的視点から価値があるか否かをどの程度認識するかに依存する。「賭けに負けてその対象を失うことになる」と、生物としての生存に関わり、困った状況（ひいては死ぬことを含む）になる」という意味において、極小でも極大でも“bet”が求める序列化と極性は共通の性質も有する。NPIsは否定文に特徴的に現れ、否定文を強める目的で用いられることから、強める目的においては“bet”が求める序列化にも、極性と通じるものが存在する。

量・程度表現以外でも序列や極限は表現される。“He is the last person to tell a lie.”は字義通りには「彼は嘘をつく最後の人物だ」ということから「一番嘘をつきそうにない」と解釈される。ここには最初から最後という序列が存在する。また、“Over my dead body you'll marry her.”は「俺の屍を超えれば、お前は彼女と結婚できる」ということで、いわゆる「俺の目の黒いうちは絶対に彼女との結婚なんて許さないぞ」と解釈される。死という極限を持ち出して強意を表す。ここには生に始まり死に終わるという序列と極限が存在する。極小要素が「全て」や「強調」を示せるのはNPIsを通して知られるところだが、具体的なモノの序列と極限と主観性の関わりは未だ十分に扱われてこなかった。“bet”が求める序列化と極性には人間が主観的に与える価値の序列が存在する。

3.4 “bet”にかかわる主語の時制と人称と Grice (1975) 的視点について

“I bet (you)”に関わる使用法と時制について、以下のことが知られている。
(Practical English Usage, Oxford University Press, 194: 1995, Swan)

(38) I bet (you) can be used in an informal style to mean “I think it's probable that.”

That is usually dropped.

a. I bet (you) she's not at home.

- (39) After I bet (you), we often use a present tense to refer to the future.
 a. I bet (you) they don't come this evening. (OR I bet (you) they won't come...)
 b. I bet (you) the Conservatives (will) lose.

また、Longman Grammar of Spoken and Written English (Pearson, 459: 2007) には、*bet, doubt, know, matter, mean, mind, reckon, suppose, thank* 等の一連の動詞について、*verbs occurring over 80% of the time in the present tense.* であることが紹介されている。さらに、*Many of the mental verbs strongly associated with the present tense express emotions or attitudes, especially in conversation. Common verbs of this type are bet, are, doubt, fancy, know, mean, mind, reckon, suppose, thank, want* と書かれている。つまり、“bet” は単なる思考動詞ではなく、“I bet (you)~.” という場合には、“probable” (恐らく) という不確かさも必要で、それも現在形での使用が頻度が高いのである。これは思考動詞として用いられつつも、その背後に「賭け」の性質が残っているからであると考えられる。

そのことは時制だけでなく人称にも関わっている。“I bet my [bottom dollar/ shirt].” と “You (can) bet your [bottom dollar/ shirt].” との相違は最終的には「認知主体が~のように確信する・思う」ということであるのだが、ここで言う認知主体とは話者のことであり、“You (can) bet your [bottom dollar/ shirt].” という用例における you というダイクシスは単なる純粋な「あなたは~であることに賭けます、あなたは~であると思います」ではなく、I の視点が投影されていると考えることもできるのである。言い換えると、“(I am sure that) you (can) bet your [bottom dollar/ shirt/ life].” と解釈していると考えられる。したがって、“I bet.~.” の方は認知主体がそのように事態について確信していれば良いことであるので、真実であろうとなかろうと認知主体が強く信じていれば表現として成立する。それに対して “You bet.~.” は字義レベルでは “You” が認知主体であるため、話者 (I) は聞き手 (You) がそのように信じているか、ましてや賭けるか否か、決めることはできない。聞き手 (You) の事態認識内容を聞き手 (You) 自身以外が決めることはできないので話者 (I) が表現することはできないはずなのである。つまり「あなたは~であることに賭けます、あなたは~であると思います」とは本来、話者 (I) は言えるはずがなく、不可能である。このことから “You bet your [bottom dollar/ shirt/ life].” よりも、“You can bet your [bottom dollar/ shirt/ life].” の方が丁寧で押しつけがましくなく、権威主義的でないという感覚が裏付けられる。“can” を加えることで「賭けます (すなわち、賭ける)」ではなく「賭けることができる」という意味になり、「賭けても良いくらい確実なこと」という比喩的表現に近づく。Grice (1975) の Cooperative Principles の視点と照らしても、“You (can) bet~.” の後続内容に関して話者 (I) の責任で未来の賭けの勝負が決まるものである方が誠実である。「真実であることを述べよ」という maxim について、後続する内容が話者 (I) の責任で未来の賭けの勝負が決まるものでない場合、話者 (I) は責任が取りきれず、maxim を順守しているとはいいきれない。話者 (I) の責任において未来の賭けの勝負が決まるものならば話者 (I) が未来で行為を遂行すれば良く、「真実であることを述べよ」という maxim の違反になりにくい。自分の未来の行動につ

いて「あなたは賭けても良いですよ」と言うことは「約束」ともつながり、後続内容に関して話者 (I) の責任で未来の賭けの勝負が決まったり、話者 (I) がその事態を本人なりに確信していたりするのであれば違和感がない。

4. “I bet.” / “You bet.” の意味解釈とその基盤

4.1 “I bet.” の場合

これまで動詞構造として “bet” には「[人に] [金銭・利益を] [ある事態について] 賭ける」という三要素があることを指摘し、それら要素のいずれかの省略が可能であることも見た。ここでは複数要素の省略と考えられる “I bet.” / “You bet.” という表現を論じる。

OED (Oxford English Dictionary) では “To lay a wager, be assured, certainly” の例として、以下の表現が示されている。

- (40) “Is it loaded?” “I’ll bet you! What doesn’t it hold?”
- (41) “Are you drunk?” “You bet.” “Then you move off from here.”
- (42) “He’s a quick thinker, then,” said Bob. “You bet you!”

これらの表現では [人に] [金銭・利益を] [ある事態について] が明示されず、聞き手は [人に] [金銭・利益を] [ある事態について] の部分に何が入るのかを推論する必要があるが、実態として口語では頻繁に用いられ、場面に応じて [人に] [金銭・利益を] [ある事態について] を一つ一つ吟味するよりは、単なる応答表現の定型句として定着している。Longman Advanced American Dictionary (Pearson, 135: 2007) では “I bet (you)~” と “I’ll bet.” が混在されつつ、以下の分類がある。

- (43) a) to be fairly sure that something is true, that something will happen etc., although you cannot prove this: *I’ll bet that made her mad!*
- b) said to show that you understand or can imagine the situation that someone has just told you about: “The vacation was great.” “I’ll bet.” “*I’m tired.*” “*I bet you are.*”
- c) used when you are asking someone to guess something: *I bet you’ll never guess who I saw this morning.*
- d) said to show that you do not believe what someone has just told you: “*I was really worried about you.*” “*Yeah, I’ll bet.*”

“I bet.” は字義通りの「私は賭ける」ではなく「①確かに、大丈夫、そのとおり、②[疑いを示して] 怪しいものだ、さあね、どうだろうか」という意味になる。①は相手が述べたことに対する同意表明に使うのに対して②は疑いを示し、相手の発話が明らかに嘘だと自分では思い、①と字義通りには同じながらも、ほぼ逆の意味を表明するときに使う。①②のどちらの意味であるのか文脈依存的である。表情、イントネーションといった語用論的要素によって①②のいずれの解釈かを決める必要がある。

(44) A: The view from the Eiffel Tower was so beautiful! B: I bet! / *You bet!

(45) A: I went to the pool today. It was so much fun. B: I bet! / *You bet!

「私は、あなたが今述べた内容について正しいと思うから、発言内容が正しいということに賭けても良い、賭けても（おそらく）負けないと思うから賭けても良い」すなわち「あなたが今言った内容には同感する（しかし、100%の確信はなく、またその証明もできない）」「そうだろうね」「自分もそうなのだろうと思う」の意味として解釈できる。一方で、相手の発話に疑いを示したい場合、ためらいがちな発音や呆れて軽蔑するような表情を伴う必要がある。相手が述べた内容が誤っており、明らかに嘘であるにもかかわらず、字義レベルでは同意するふりをするので、冗談や嫌味としてのアイロニー表現の一種であると言える。上記 d) のように真偽の判断が場合に拠ることもあれば、以下のように明らかな嘘やジョークであるような場合にも用いることができる。

(46) A: I saw a superman yesterday. B: Yeah? I bet.

明らかに信じがたい内容である場合、同じ “I bet.” でも表情やイントネーションを伴って「同意」ではなく「疑念」「呆れた気持ち」、心のこもらない「へえ、そうなの（信じてはいないが）」という単なる表面的な相槌、すなわち嫌味や冗談として機能する。つまり、「同意」と「疑念」という二つの相反する態度表明を “I bet.” は伝えられる。

4.2 “You bet.” の場合

“You bet.” の逐語訳は「あなたは賭ける」だが、これも賭け事の意味は消失しており、実際は「①もちろん（という同意）、②（感謝されたことに対する返答）どういたしまして」という二つの意味である。Longman Advanced American Dictionary (Pearson, 135: 2007) で “You bet.” は以下のように紹介されている。

(47) You bet.

a) said to emphasize that you agree with someone or to say that you are definitely going to do something: “Are you taking the whole family?” “Sure, you bet.” “Yeah, it helps to have a little more money- you bet it does.”

b) used as a way of replying to someone when they thank you for something: “All right, take care, thanks, Daphne.” “You bet.”

前セクションでは主語が「私」であったのに対し、ここでは主語が「あなた」であるのに結果的に「（私は）そう思う」「そのとおり、もちろん」と相手の発言に対する同意を “I bet.” と同様に示す点が興味深い。ただし、同意の質が異なる。まず、“of course,” “surely,” “certainly”（もちろん）という意味になる①から分析する。

(48) A: If I study math very hard, will I be able to pass the exam?

B1: I bet. (自分は確かにそうだと思うから、自分はそのことに賭けてもいい)

B2: You bet. (自分は確かにそうだと思うから、君はそのことに賭けてもいい)

“You bet.”とも“I bet.”とも言えるものの、B2の方が確信度が高い。未来に不確定の要素を含んでおり、なお「きっとそうだ。ほぼ確実だ」という部分があるからこそ賭けが成立する。この例では話者も聞き手も両方とも賭けへの参加が可能である。

(49) A: I think Elizabeth loves you.

B1: I bet. (I am sure that Elizabeth loves you.)

B2: You bet. (I am sure that you can bet that Elizabeth loves you.)

(50) A: Is he going to come tonight?

B: You bet. / I bet. / *He bets.

一方で、話者である(認知主体)が賭けられない、賭けの参加が不自然な場合がある。

(51) A1: Are you going to school / A2: Are you going to the mall now?

A3: Will you go to school tomorrow?

B: You bet! / ??I bet.

(52) A: Are you coming?

B: You bet I am. / ??I bet I am.

“You bet.”は“*That's right. I'm going.*”として解釈され「もちろん」の意味だが、ここで“I bet.”とはならない。なぜなら「自分が学校に行くところである」あるいは「明日学校に行く」ことは近接未来において十分実現でき、日常生活では通常、自分の意志で実現することは容易でほとんど 100%可能で、賭けの対象にするような困難さを伴う事柄ではないという背景がある。つまり、通常自分自身の行為について自分でコントロールしやすく、約束達成の実現状態に確実に持って行き易いと捉えられる対象には、“I bet.”が奇妙になる。一方、“You bet.”であれば「あなた(You)がそのように賭けてくれて構わない、私(I)自分の行為に対して」という確信の表明であるから奇妙ではない。自分の身に(ほぼ)絶対に起こると話者本人が知っていることや自分のコントロール可能なことや実現が当然決まっていることについて“I bet.”と言うのは不自然である。賭けるほどの難易度やチャレンジのある内容でなく話者が容易に実現可能である賭け・約束内容に“I bet.”を使うことは不自然となる。ただし、“You bet.”として相手に賭ける分には構わない。また、終わってしまい結果が出ており目の前で事実が 100%わかっていることにも、話者は賭けられない。

(53) A: Will you turn/be fifteen next week?

B1: You bet! / *I bet!

誕生日がいつかは 100%自分自身が確実にわかっているのに、“I bet.” は奇妙である。

(54) A: I had a terrible night yesterday.

B: *You bet (you did)! / I bet (you did)!

昨晚のことは既に本人が経験したことで、“I bet.” (わかるよ) とは言えるが、“You bet.” は奇妙である。また、深刻な内容は賭けるべきでなく一般に無礼になるので不適切である。もし使えば「そうだろう、そうだと思った」等の無礼な態度表明となる。

(55) A: I will die within two months. I have cancer.

B: *You bet (you will)! / I bet (you will)! (言えるが無礼)

もう一つは、「どういたしまして」の用例である。

(56) A: Could you give me a hand? B: You bet!

(57) A: Thank you for your help! B: You bet!

特にアメリカ口語で用いられる “You are welcome.” のくだけた表現で、“You bet.” を “You can bet on me.” “You can bet my character.” “You can count on me.” “You can rely on me.” 等パラフレーズして理解可能である。ここでも賭け事の実際の意味は消失している。依頼文と “You bet.” という隣接ペア的事例があり、それに対し “You can bet that I could give you a hand.” という解釈が加わり、慣用化し、いわゆる「どういたしまして」として定着したと考えられる。“I bet.” が「どういたしまして」として定着しなかったのは、話者 (I) にとって “give a hand” する (手伝う) 行為は即時に話者にとって実現可能な内容で、賭けをするような内容でないためという説明が可能である。“give a hand” するか (手伝う) は賭けるまでもなく自分の意志と照らせば自明であり、“I bet.” は奇妙である。

(58) A: Would you mind opening all the windows in this room?

B: You bet! I'll do it right away.

本来、“mind” を用いるのであれば、「気にしません、良いです、引き受けます」と伝えるために “No, not at all” のような否定文が来ることが望ましいかと思われるが、ここでは “You can bet that I will NOT mind opening all the windows.” という理解内の NOT を表面化させるパラフレーズは不要なほどに、了承の意味が定着していると考えられる。

また、“I don't bet / You don't bet.” 等と否定文では始められない。これらが相槌としての機能だからである。I don't bet that SV / You don't bet that SV.” のようにいきなり自ら始めるのも不自然である。最初に “I am sure that SV.” 等の相手の主張があ

り、それに対して初めて I don't bet that SV.や "I'm not going to bet you." 等の「いや、そうは思わない」という否定文による反応が可能になる点は、一般の否定文の特徴とも矛盾しない。

4.3 さらに拡張と“bet”が名詞である場合

OED (Oxford English Dictionary) では “Also in corrupt forms (I, you, etc.) betcha, betcher, representing colloq. pronunciation of *bet you or your (life)*.” として以下の表現も示されている。

- (59) You betcher life!
- (60) “You’re homesick, what?” “You betcher.”
- (61) “Betcher I know where to find the sole survivor of the Leichardt expedition.”
- (62) “Betcher!” mocked the governor.
- (63) I collared a kid...and asked him if he wanted to earn a shilling. “you betcha, mister,” he said.
- (64) Your tea’s cold, I betcha [betcher/ bet you].

音韻的变化も伴い、より慣習化して「もちろんだ」という同意を表明することになっている。ここで「賭け・賭け事」の意味は消えている。また、動詞 “bet” が名詞として用いられ、「賭ける」から「賭け・賭け事」となるだけでなく、「取るべき道(方法)」や「意見」といった拡張的な意味で使われる場合を扱う。

- (65) Mom had a bet on the Yankees and won \$20. (ジーニアス)

単なる実際の賭け事を指して、「20 ドルを得た」と解釈できる。以下が拡張例である。

- (66) Your best bet is to... …するのが最良の策だ。
- (67) My bet is (that) she won't come. どうも彼女は来そうもない。
- (68) a good bet 有望な人 [物・策]、かなり確かなこと、ほぼ間違いないこと
- (69) a good [one's best, the best] bet うまく行きそうな [最も確実な] 方策
- (70) a bad bet for marriage 結婚相手にふさわしくない人

これらの表現は、「賭け事」という具体的な内容が「考え」「見込」という抽象的内容に変化したと考えられる。また、「賭け事」そのものが人、物、方策として解釈されうるといふ点も特徴である。これらはいずれも確信の方向に向かっていく表現なのであるが、同時に共通して「かなり」「ほぼ」といった不確実性が依然として存在し続けている。この点において “bet” の「賭け事」としての性質を残しているとも考えられる。

4.4 “bet” の背景にある英語の慣用表現と価値観

最後に、“bet” の用例の基盤となっていると考えられる英語の慣用表現を扱う。

(71) Put your money where your mouth is.

“your mouth” とはすなわち “one’s behaviors or words” を指す。口先では調子の良いことを言うが、口だけで何もしない人に対して「言うだけでなく、ちゃんと行動しろ。証明してみろ (Prove it.)」という意味で用いる。Cambridge Advanced Learners Dictionary & Thesaurus, (Cambridge University Press) では “to show by your actions and not just your words that you support or believe in something” と説明されている。なお、現代日本語では「不言実行」「有言実行」の両方が存在するが、元々は「不言実行」で、「有言実行」は「不言実行」をもじってできた語である。(新明解四字熟語辞典, 1998, 三省堂)。社会人男女 500 人を対象にした 2014 年 9 月 8 日付の「マイナビ スチューデント」(<https://gakumado.mynavi.jp/freshers/articles/12210>) (調査時期: 2014 年 8 月) が紹介した調査で「有言実行と不言実行、どちらがかっこいい?」という問いに対し半数以上が「有言実行派」を選んだ。語源は「不言実行」が先だが、「不言実行」が基本的文化的価値であった時代から推移し、目標を口に出して達成する「有言実行派」を高く評価する人が増加したと考えられる。「有言実行」がかっこいいと思う理由として「日本人は不言実行の方がカッコイイとされがちだが、他人に気付かれなければ評価もされない。欧米人を見習うべきだと思う」「リスクを負う勇気がかっこいい」等がある一方、「不言実行」がかっこいいと思う理由として「自己主張の強くない感じがよい」「能ある鷹は爪を隠す」等があった。不言実行: 220 人 (44%)、有言実行: 330 人 (66%) という結果から本調査では「有言実行」が求められている可能性が指摘されているが、英語でも “big mouth” で物理的に大きな口を指すだけでなく、大言壮語、大きな口を利く人、おしゃべりな人、嘘つきな人を指し、否定的価値を持つ。また、英語にも「能ある鷹は爪を隠す」に類する慣用句は存在する。

(72) a. Still waters run deep/ b. Cats hide their claws/ c. Who knows most, speaks least.

ただし、これらは直接的に金銭や賭け事と関わってはいない。「自らの言述が真であると責任を持つ、リスクを負う、証明する」という姿勢に対して “Put your money where your mouth is.” という慣用句は一つの裏付けとなっており、さらには、元々「ぺらぺら喋ることは安っぽく真実味が無い」という見立てが存在しそうである。

(73) Talk is cheap.

一般に「話すこと」に具体的な値段は付けられないが、「口では何とでも言える、口先だけの言葉に重さや価値はない」という意味である。また、“two cents (twopence)”

は実際の金銭としての硬貨を指すだけでなく、「ほとんど価値のないもの」から転じて、「(求められていない・歓迎されない) 自分の意見」を謙譲的に表現するときにも用いられる。“That’s just my two cents.” という場合、「意見、考え」を指す。“throw (in) one’s two-cents’ worth,” “put one’s two cents/twopence (worth),” “stick in my two cents” 等の類似表現がある。こうした表現の基盤として、Lakoff and Johnson (1980) になぞらえて言えば IDEAS ARE MONEY. というメタファーの見立てが背景に存在している。このような考え方があるからこそ “bet on what one say” という表現が存在し、自分の発言に対して金銭や価値のあるものを「賭けて」、貴重なものを危険にさらすという行為を通し、自分の確信度合や、そのことが真であることを補強し、強調し、相手を説得し、あるいは相手を疑うことにもなると考えられる。

【注】

- (1) 「命を懸ける」「名／名誉／神に懸ける」等の場合、漢字は「賭ける」と一般に使い分ける。
- (2) 引用元には掲載されていたが「現在、日常生活で boots は一般に聞かない・使わない。ただし、意味はわかる」という意見をネイティブスピーカー（米2人・英1人・加1人）から得た。

【参考文献】

- 山梨正明. (2000a) 『認知言語学原理』、東京：くろしお出版。
- Grice, Paul H. (1975) “Logic and Conversation.” in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, pp. 41-58, New York: Academic Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.
- Stoffel, Cornelis. (1901) *Intensives and Down-toners: A study in English Adverbs*. Anglistische Forschungen, 1. Heidelberg: Winter.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. (2006) The semantic development of scalar focus modifiers. In Ans can Kemenade and Bettelou Los, eds., *The Handbook of the History of English*, 335-359. Oxford: Blackwell.
- Yamanashi, Masa-aki. (2000b) “Negative Inference, Space Construal, and Grammaticalization.” in L. R. Horn and Y. Kato (eds.) *Studies on Negation and Polarity*, pp.243-254, Oxford: Oxford University Press.
- van der WOUDE, Ton (1994) *Negative Contexts*, Ph.D. Dissertation, University of Groningen.

(2015年9月3日受理)